

井上靖研究動向 (平成二十六年一月～二十八年十二月)

劉 東 波

本号より第十四号に引き続き、井上靖に関する「参考文
献目録」および「研究動向」の掲載を再開する。前者は山
田哲久、後者は劉東波の担当である。

平成二十六年一月から二十八年十二月の間における井上
靖研究の動向を見渡すと、最も注目されるのは、井上靖関
連の単行本が相継いで刊行されたことである。

まずは、井上靖の生前未公開の貴重な資料を一冊に纏め
た『井上靖中国行軍日記』(二十八年三月、井上靖文学館)。
本書は三つの部分から構成されている。Ⅰは「中国行軍日
記」、Ⅱは「戦地からの手紙」、Ⅲは「小説『異国の星』よ
り」。

Ⅰの「中国行軍日記」は、日中戦争初期に応召し、中国
に送られた井上靖の約半年間の従軍日記である。当時勤め
ていた大阪毎日新聞の社員手帳に綴られていた。その手帳
は二十年十月、井上ふみ夫人逝去の後、家族が遺品の中か
ら発見した。本書収録以前に翻刻され、曾根博義の「解

説」と併せて二十一年十二月『新潮』に初掲載されている
(本誌十四号「研究動向」参照)。

本書の編集・発行を担当したのは、井上靖のふるさと・
静岡にある井上靖文学館である。「編集後記」によると、
本書は先代の館長・松本亮三を始めとする井上靖文学館が
「あゝの夏から70年」井上靖と戦争、家族、ふるさと」
展」に合わせて企画したという。Ⅰの「中国行軍日記」の
他、Ⅱの「戦地からの手紙」に、井上が戦地から湯ヶ島の
両親に宛てた五通の手紙と、応召を受けた時、父の隼雄と
母のやゑから井上靖に宛てた速達一通が載せられている。
Ⅲには、井上靖の長編小説『異国の星』より抜粋された作
品本文が収録されている。抜粋の部分はいずれも行軍体験
をもとに書かれたものであり、『井上靖全集』に未収録の
ため本書の最後に収録されたという。曾根博義が「解説」
に記すごとく、本書は「井上靖の戦後の文学の根底」を貫
く「弱いところ」、「強くて逞しい精神の産物」だといえよ

う。井上文学と戦争の関係を論じる研究にとつて、本書は不可欠の貴重な資料である。また、本書の刊行を通して、井上靖の遺族の井上靖研究に対する開放的な姿勢や井上文学の発信地である文学館の積極的な動きが示されている。

次には、井上靖の長女・浦城いくよの『父 井上靖と私』（二十八年五月、ユーフォーブックス）が挙げられる。巻頭の「三十五年ぶりに届いた父からの手紙」に、本書が刊行されるきっかけとなった手紙が紹介されている。時空を越えて家族への愛を示している手紙である。その次は、井上家が住んでいた家という角度から、「子供の頃住んだ家」（茨木、湯ヶ島、京都など）と「世田谷の家に移つて」に分けて、井上家のかつての生活を詳しく述べている。さらに、「祖父母と父母」と「父の趣味 交友」に、井上靖の家族や友人に関わる多くのエピソードが載せられている。次の「旅の思い出」では、外国まで同行した旅に見られた父の姿を描いている。最後の「父の作品にまつわる思い出」では、井上の四つの作品と一つの写真集と関わる思い出が語られている。作品を創作するための取材や、創作中の井上靖の姿が描かれている。井上靖の遺族は、井上靖記念文化財団の機関誌『伝書鳩』を主な媒体として、多くの貴重な資料を公開し、家族という面から井上靖に関する情報を世界へ発信している。浦城の著書には、身近な家族の視点から、父としての井上靖の作家像、文人像が生き生きと描き出されている。これは井上靖の伝記研究にとつて、貴重な一冊である。

最後は、井上靖研究を長年続けてきたベテランの研究著者・藤澤全の『井上靖の小説世界 ストーリーテラーの原風景』（二十六年九月、勉誠出版）である。藤澤には井上靖研究に関する著作が多数あるが、本書は前の『詩人・井上靖 若き日の叙情と文学の原点』（二十二年九月、角川学芸出版）の姉妹編だという。前者は詩作を中心に井上文学の原点を辿つたのに対して、本書は井上の自伝的作品である『しろばんば』を始め、十二の現代小説を選び、各作品における「物語作法とそのコツ」を分析している。さらに、「作品生成の秘密」を解明しながら、広い視野から「物語の形質と文芸性」を探究している。巻末に「略年譜」が載せられ、井上靖の現代小説の研究における必読の一冊である。

今回対象とする研究動向の期間内に、本誌『井上靖研究』は、十三号（二十六年七月）から十五号（二十八年七月）まで刊行された。十三号には、井上靖の中国物、あるいは「井上と中国」を論じる論文が半分以上を占めている。蔡慧穎の「中国における『天平の甕』と『敦煌』の受容状況」は、二作品の創作背景から分析し、中国国内における訳本の誕生や井上文学に対する評価などの角度からその受容状況を紹介している。西座理恵の「井上靖と〈中国〉について考える」は、井上靖が創作した中国を舞台とした作品の出発点に遡る論である。西座の論では「井上靖と〈中国〉の出発点はやはり西域への夢である」と述べ、井上靖の中国物の研究に対する新たな方向性を提示している。

十四号（二十七年七月）では、〈資料紹介〉に注目したい。

藤木尚子の「神奈川近代文学館所蔵の井上靖資料について」である。周知の通り、井上靖生前の蔵書や生原稿などはいくつかの文学館（資料館）に保管されている。しかし、これまで、どの文学館（資料館）にどのような資料が保管されているのか、情報はあまり整理されていない。そうした中で、一番多くの資料を保管している神奈川近代文学館は、積極的に資料の整理を行っている。藤木のこの〈資料紹介〉は、同文学館の職員の立場から書いたもので、資料の検索方法や閲覧方法も解説し、資料の活用を呼びかけている。

十四号掲載の論文に目を向けると、李哲権と劉淙淙は水・河（川）に関わる作品「聖者」と「洪水」を論じている。今までこの二作品に関する本格的な論考が少ないため、両者の論は大きな意義があると思われる。また、杉淵洋一は「井上靖におけるフランス」で、斬新な論を展開している。氏は、井上靖の「フランス滞在の意義」を考察し、「フランス滞在」が井上文学に与えた影響を究明している。さらに、その「滞在」は「井上靖という人間を次のステージへと誘った分岐点」だと結論づけている。

十五号の内容は非常に充実している。多数の論文とエッセイが載せられ、当会の新企画の成果として、一本の講演記録も掲載されている。高木伸幸の「井上靖「天平の薨」考」は、作品に表された二つのモチーフを考察し、足立文太郎と安藤更生から受けた影響を論じている。独特の視点から論を展開し、「天平の薨」に「学問」と「冒険」が

「融合調和」されていると述べている。蘇洋と劉淙淙は「楼蘭」と「孔子」について、実証的な研究成果を出している。また、平成二十七年の井上靖研究会（冬季）より、生前の井上靖と関わりが深かった方による交流や思い出などをめぐる講演を企画した。最初の講演者は福田美鈴である。この講演の内容を多くの人々に知ってもらうため、本号に尾崎瑠衣が講演記録をまとめ、掲載している。今後、このような貴重な講演内容を活字化して本誌に掲載する予定である。

井上靖文化記念財団による『伝書鳩』は、十五年（二十六年十二月）から十七号（二十八年十二月）まで発行された。十五年から、井上靖の子供たちの配偶者からの寄稿を載せる企画が立てられた。浦城恒雄（井上靖長女の夫）、黒田秀彦（次女の夫）、井上甫壬（長男の妻）、三名の文章が掲載され、義父の井上靖に対する思い出や井上靖から受けた影響などを語っている。家族の面から、井上靖の作家像を豊かに描く資料である。また、井上靖の次男・井上卓也の連載エッセイも、八号初回から掲載されてきたが、十六号で最終回を迎えた。多くの未公開の写真を添えて、井上靖に関わるエピソードが次々と紹介されていた。野本寛一の「井上靖の原郷——伏流する民俗世界」の連載は（四）まで掲載されている。特に、十六号の連載では、井上靖の自伝作品である「幼き日のこと」や「しろばんば」に登場した食物、「山菜・野草」「天城の天然水」「金山寺味噌」「とろろ」「美濃柿」などを取り上げ、作品本文と関連して解説を加

え、井上靖の自伝作品に潜んでいる「民俗の深層」を探っている。十七号には、名作「氷壁」の主人公・魚津恭太のモデルとされている石原國利の「シルクロード、ヒマラヤの旅」が掲載されている。石原は、多くの未公開の写真を添えながら、井上靖との旅を、「体験したことがそのまま」伝わるように描いている。その旅は、取材を兼ねた旅であつたため、石原の文章に、井上靖がメモを取る様子や、取材の過程が記録されている。

以下、単行本・雑誌・紀要などに掲載されている文献について記す。

高木伸幸の「井上靖「聖者」論——イシク・クル湖伝説と現代——」（『国文学攷』二十六年九月）は、「聖者」に関する先行論を踏まえた実証的な論考である。歴史研究者・加藤九祚の訳書『湖底に消えた都』（昭和三十八年十二月、角川新書）に見られる「二つの伝説」が「聖者」の主典拠だと論じ、井上の中央アジア旅行の際に、加藤から授けられた知識が作品の創作に影響を与えたことを明らかにした。また、登場人物の「聖者」と「若者」の人物造形を分析し、それらの創作過程を述べている。さらに「若者」が聚落の人々に与えた影響を取り上げ、本作には「経済成長の下で伝統が軽視され、急激に変化していく日本人の生活と行動に対する井上靖の批判的な見解」が託されていると論じている。論の最後に、「精確な記述を志向する井上靖の謙虚かつ真摯な創作姿勢」を強調している。本論文は、「聖者」だけではなく、「文明批評的要素の強い作品」の系列に属

するほかの作品の研究にとつても、指針となる論考だといえよう。

瀬戸口宣司は、詩人として活躍しなから、長年井上靖の詩に関する研究も行っている。本誌（エッセイ）欄に、井上靖の詩に関する文章を続々と出している。今回は長年の研究成果を一冊の単行本、『詩』という場所（二十六年八月、風都舎）に収めて刊行した。井上の『季節』、『遠征路』、『傍観者』などの詩集に収録されている詩を挙げながら、詩に見られる「叙情性」「物語性」「孤独感」などを述べている。

山田哲久の「井上靖「僧行賀の涙」論——方法としての〈視点〉」（『同志社国文学』二十六年十一月）は、神奈川近代文学館所蔵の「僧行賀の涙」に関するメモ資料を翻刻の上、作品の創作方法および典拠を究明した。さらに、井上が参照した「遣唐使」に関わる資料を提示し、本作は「天平の薨」の「雛形」だと論じている。

宮崎潤一の「井上靖の従軍体験から見えるもの」（『群馬の思想・文学・教育』二十七年十二月）は、井上靖の西域小説と詩集「北国」の「源泉」を探究する論である。宮崎は、井上の従軍体験と関わる資料（『西川軍隊手帳』と『井上靖行軍日記』）を大量に引用し、それと詩との関連を説明している。「楼蘭」「敦煌」に描かれている「人間の営みの無常さ」「慌ただしく出発する部隊」の描写は、「実体験をもとに伝聞や後の資料も踏まえた上虚構を加えること」で成立したと述べている。今後の西域物の研究に対して、井上

靖の戦争体験と関連付けて作品を読むという新しい方法を示している。

若手研究者では、日本の大学院で井上靖研究を行っている中国人留学生・蘇洋、劉淙淙、劉東波三人の論文が見られる。蘇洋の「井上靖『孔子』論——負函という地の意味」(『阪神近代文学研究』二十七年五月)は、井上靖の「現地への調査旅行」に関する資料を分析し、「負函」が選ばれた理由と「負函」の意味を考察している。さらにそれと小説の主題「天命」との関連を探究している。

劉淙淙は井上文学における〈川〉を中心に、先述した「洪水」論のほか、「井上靖『孔子』における〈川〉の象徴性」(『解釈』二十八年二月)も出している。『孔子』の創作動機から論を展開し、作品における「逝くもの」の意味を考察している。上記の二つのほか、「孔子」を論じる論文は、半田美永の「井上靖『孔子』覚書」(『皇学館論叢』二十七年六月)と綾目広治の「井上靖『孔子』論」(綾目広治『柔軟と屹立——日本近代文学と弱者・母性・労働——』二十八年十二月、御茶の水書房)が挙げられる。井上靖晩年の大作『孔子』は、近年、研究者たちの注目を集めている。

劉東波は、井上靖の西域物を中心に研究を進めている。「井上靖『漆胡榿』論——『西域物』の源泉——」(『現代社会文化研究』二十八年十二月)は、初期の西域物「漆胡榿」を取り上げ、詩から小説への影響を明らかにし、井上が参照した「漢籍」や作品における「虚構」の考察を通して、「創作方法」を探究している。さらに「漆胡榿」における

四つのエピソードとほかの西域物とを比較し、西域物における「漆胡榿」の位置づけを示している。

以上のごとく、この三年間において、井上靖研究では、新資料の公開・出版、長年月の研究成果をまとめた研究書すぐれた論文などが多く見られる。これは、各文学館(資料館)や井上靖の遺族、および多くの研究者が共同で作りに上げた成果だといえる。その中で、『井上靖全集』に未収録のものと文学館(資料館)に寄付されたものの公開、紹介が積極的になされていることは歓迎すべき動向である。また、中国人研究者が井上靖の中国物、あるいは西域物に関する実証的な論考を出し続け、中国の日本文学研究会で井上靖研究をめぐる口頭発表も多く見られる。これは井上靖研究の国際化が進んでいることを示しているといえよう。一方で、本誌十四号の「動向」でも言及されたが、日本人若手研究者の活動はあまり活発ではない。まもなく「平成」が終わり、新しい年号を迎える。新時代に、井上靖文学の面白さ、あるいは井上靖文学の価値を多くの人々に伝えることは、文学館(資料館)、遺族、研究者および当会にとつての新しい課題である。